

# “Docta ignorantia”の立場

山 下 一 道

## 序

「知ある無知 (docta ignorantia)」と「対立の一致 (coincidentia oppositorum)」<sup>1)</sup> という二概念が、クザヌス哲学の中心概念であることには異論がないと思われる。枢機卿ユリアヌス師への手紙において、クザヌスの神経験の場としての「知ある無知」は「把握され得ないもの (incomprehensibilia) を把握され得ない仕方 (incomprehensibiliter) 包摂する (amplico)」<sup>2)</sup> というパラドキシカルな立場であり、「人間的な仕方では知られうる消滅し得ない真理を越え、矛盾するものが一致する単純性へと自らを高める」<sup>3)</sup> こと (=超越) として生起すると述べられている。換言すれば、「越えるものと越えられるものを見いだしうる領域では、端的に最大なものに到達することはできない」<sup>4)</sup> という命題が「知ある無知の規則 (regula doctae ignorantiae)」<sup>5)</sup> として定式化されるように、人間的認識の限界知としての「知ある無知」において、最大なものは対立を越えたもの (=「把握され得ないもの」として開示され、「対立の一致」の概念のもとで、一切の対立の排除と否定を通じて (=「把握され得ない仕方」) 何物もそれに対立することなき次元への観入 (=超越) のうちで漸近的に接近されうるのである。このように、「悟性的な比量的思惟 (discursus rationis)」を越えた「理性的な観 (visio intellectualis)」としての「知ある無知」と「対立の一致」のもとに観られた最大なものは、対立の以前 (ante) への超越という動性のうちで、相互媒介・限定的に次第に深い無知の自覚とどこまでも対立を越えた「一性 (unitas)」として顕れるのである。この小論において、我々は、①クザヌスの「知ある無知」は、対立の以前・非対立のうちへの超越において成立する開かれた動的思惟であり、②「象徴的探究 (symbolica investigatio)」として展開され、対立の以前への二重の超越として生起すること、そしてこの超越における存在理解のうちに、③伝統的な形而上学に対して新しい存在論の萌芽がみられることを、『知ある無知について (De docta

ignorantia)』(1440) 第 1 巻における「最大性 (maximitas)」の分析を中心に、出来る限り明らかにしてみたいと思う。

## I

I-1. 『知ある無知について』第 1 巻第 1 章において、クザーヌスは比量的人間悟性 (humana ratio) による認識を「比較し比を求めることによる探求 (comparativa et proportionativa inquisitio)」と規定し、この認識の在り方を分析して無限なものへの到達不可能性の知に至るのである。すなわち、われわれの認識は探求されるべき未知の対象を予め確実なものとして措定されたもの (=尺度) と比較し、類、種、場所、影響、時間等々といった種々の観点における合致と差別という点からそれとの一定の比関係のうちで規定すること<sup>6)</sup>として遂行される。しかしながらこの認識が、測るもの (=尺度) と測られるものとの対立関係のうちで成立する限り、どれほど多くの観点から規定されたとしても、尺度と測られるものの間には常に何らかの差別が残る<sup>7)</sup>、測られるものは類似した事物の間での段階的な相等性 (aequalitas gradualis) において規定されるだけで、それ自身からその厳密な相等性 (aequalitas praecisa) において規定されることはできないのである。このように、われわれの認識は「無限であるかぎりの無限は一切の比をさけるがゆえに知られない<sup>8)</sup>」という無限への到達不可能性を含んでいるのである。

I-2 同様な事態を、クザーヌスは肯定的名称によって神を規定する肯定神学 (theologia affirmativa) のうちに見いだすのである。人間悟性の名称付与の働きによって与えられる諸概念は、一性 (unitas) には複数性 (pluralitas) あるいは多性 (multitudo) が対立するように<sup>9)</sup> 特殊的で・区別され・それ自身に対立するものをもっており<sup>10)</sup>、或る比によって越えるものと越えられるものを許す被造物にのみ妥当するのである。それゆえ、もしなにか固有の名称が神にあてはまるならば、神は一度にすべての名称で呼ばれなければならないことになるが、それは不可能である。われわれが神に付与する肯定的な名称は被造物のうちにみられる何かあるものに従って与えられるが、それは被造物にたいする無限の力という神の被造物への関係のうちでの或る特殊な固有性に関する神の表現としてのみ適合するのであって、神それ自身には適合しないのである<sup>11)</sup>。このことを、われわれは、更に礼拝の根拠についてのキリスト者と異教徒の対話『隠された神について (De deo abscondito)』(1445) において考察

することができる。神を知らないがゆえに神を礼拝するというキリスト者に対して、その根拠を理解できない異教徒が質問するという形で進められる対話は、知ること (scientia) は真理を把握することであるという点での両者の一致にもかかわらず、真理は真理自体によってのみ把握され、他の仕方や他のものによって把握されることはできないというキリスト者の立場と、終始悟性の比量的認識の立場を堅持する異教徒の立場の対比として進められる。キリスト者は、先づものを知るとはものの何性 (quidditas) を知ることであるが、異教徒が知るといのは悟性の区別する働きによって与えられる名称によって、ものの偶有性、作用と形態の相違から理解することを行っているのであって、真理そのものを理解しているのではないことを明らかにし、この何性はそれ自体からのみ把握されるのであって、われわれが把握する如何なるものによっても知ることができない故に、知り得ない、言い表すことができない神を礼拝すると説明するのである<sup>12)</sup>。さて、この神の超越性を異教徒は依然として悟性認識にとどまり概念的に規定しようとする。先づ「無 (Nihil)」や「或るもの (Aliquid)」という規定は、それが名称である限り対立のうちにある有的な規定として退けられる。次に、神は、「無」と「或るもの」という対立を越えた、一切の言明可能性を越えた超越性のゆえに、「言明可能にしてかつ言明不可能なもの」という矛盾の合一として規定されるが、神は矛盾するものの根源ではなく、一切の根源の以前にある単一性であるがゆえに、これもまた有的な規定として否定される。ここで、一体神に関してどのように語ることができるのかという異教徒の問いに対してキリスト者は、「神は、名づけられるものでもないし名づけられないものでもない、名づけられかつ名づけられないものでもない、しかし、合一あるいは矛盾によって選言的かつ連言的に言明される一切のものも、神の無限性という卓越性のゆえに神には当てはまらないのである」<sup>13)</sup>と述べるように、神を概念的に規定しようとするならば、肯定と否定は概念としてある限り対立のうちにあるので、それは先づ肯定でも否定でも無いものとしての両者の否定的選言的合一において表し、そして、次に肯定と否定の連言的有的な合一の否定において表すという対立の二項の選言的かつ連言的否定において表されねばならないが、神それ自身はこの規定によっても決して届くものではないのである。したがって、感覚的に知られたものを原因と始源への手引きとして受け入れ<sup>14)</sup>この被造物への関係において神を規定し礼拝するという偶像崇拜に陥らないために、われわれはこの名称付与という悟性の働きに含まれている対立というあり方そのものの排除と否定を通じ

て一切の対立の以前に、如何なる言語をも絶した神の超越性を探究する否定神学 (negativa theologia) を必要とするのである。この否定神学のうちでは神は御父でも、御子でも聖霊でもなく、決して認識されない無限なものとみなされるが、その場合、神は、闇 (tenebra) がそれに対立する有体的な光としてではなく、いわば闇が同時に最も単純で無限な光であるような在り方で、一切の対立を越えその以前に如何なるものにも対立することなくわれわれの無知の闇の中に把握されない仕方であらう光っている無限の光として探求されるのである<sup>15)</sup>。

## II

II-1 以上のように、比を媒介とし比較によって成立する人間的認識は、厳密な相等性としての無限そのもの、最大性そのものに到達することができず、根底においてどこまでも無知に留まるといことが洞察されるのである。クザーヌスは、このことを「知ある無知の規則」として「越えるものと越えられるものが見いだされる領域では端的に最大なものに到達することはできない」、「無限の有限に対する比は存在しない (infiniti ad finitum est non proportio)」<sup>16)</sup>と定式化したのである。それゆえ、この認識の限界の知において、無限なもの、最大なものは、それ自身においてそれ自身から探究されねばならないのである。しかしながら、われわれの認識が比較によって対立の次元において成り立つ限り、今やこの探究は最大なものは一切の対立を越えたものとして「存在している (quod est)」という「理性的な観」のもとで、感覚的な表象としての数学的形象を媒介にして有限な形態から無限な形態へ移行するなかで、無限なもののある方をそのおぼろげな像の中で (in aenigmata) 看取し、さらにこの無限表象の中で看取されたものの意味を転輸的に (transumptive) 理解し<sup>17)</sup>、一切の形象を跳び越えての最大なもの「何であるか (quid est)」に漸近するという手続き (manuductio)、すなわち、“symbolica investigatio”、“aenigmatica scientia”として遂行されるのである。

II-2 このように、対立の次元にある存在者の単純な類似を跳び越えることとして成立する象徴的探究は、第一に、有限な数学的形象をその所属性と諸概念とともに考察すること、第二にその概念自体を同様な無限な形象へと対応的な仕方 (correspondenter) で移行させ、第三に、更に無限な形象の概念自体をどんな形象からも全く解き離されている単純な無限なものへと転輸するという三段階からなる二重の超越として

遂行されるのである<sup>18)</sup>。クザーヌスは、『知ある無知』第1巻第13章から第23章においてこの超越とそこから引き出される思弁 (speculatio) について展開している。そこでは、第一段階として、有限な線の一方を固定して弧を描くことによって三角形が、半回転することによって半円が、一回転することによって円が、更に半円を直径を中心にして回転することによって球が得られることから三角形、円、球が有限な線にその可能態として含まれていることが明らかにされる<sup>19)</sup>。第二段階として、この三角形が量的な有限な次元から非量的な無限の次元へ移される。すなわち、この上昇において、一辺が無限である三角形の場合他の二辺も無限であり、無限なものは一つしか存在しないがゆえに、この無限な三角形はもはや三つの辺から合成された三角形ではなく最も最大にして単純な三角形であること。この無限な三角形においては、三角形である限り三本の線なしには存在しないが、無限である限りその三本の線は最も単純な一本の線でなければならない、角に関しても同様で三つの角は無限な一つの角であること。そして、この無限な最大な三角形は辺と角から合成されたものではないがゆえに、線と角は同一であることが洞察されるのである。更に、同様な仕方では、三角形も円も球もその無限なあり方において無限な線に一致することが理解されるのである<sup>20)</sup>。このような非量的な無限の三角形は現実には存在しないし、感覚的に表象できないが、われわれは感覚的な表象のうちで有限な三角形を非量的な無限な領域に移しつつ、理性 (intellectus) による思惟によって、相互に異なっている三角形の単純な類似を跳び越えて無限なあり方に漸近することができるのである。この無限な形象は、有限性から思惟された無限な形象、表象可能性のうちでの漸近において思惟された最大なものであり、最大なものそのものではなく、相対的な最大性に留まるのである。第三段階は、第二段階における量的な次元から非量的な次元への超越において得られた、無限な線が現実に無限に、有限な線に可能態として含まれているもの全てでありそこでは一切のものは一であるという洞察を、絶対的に最大なものに転換することによる一切の形象からの超越であり、これによって、一切の対立を越えた最大なものが、現実に最大度に、絶対的な単純性において可能態として含まれているところのもの全てであることが理解されるのである<sup>21)</sup>。このように、象徴的探究における超越は、①量的な領域から非量的な領域への、有限から無限への超越として、更に、最大性そのものは、上昇の最終項と考えることはできないがゆえに、②この有限な表象のうちで洞察された無限なものから端的な無限性の次元への、すなわち、「なにものもそれに対立する

ことなき」次元への、したがって一切の対立を対立以前の直接性において観るという超越として生起するのである。

### III

III-1 クザヌスは、象徴的探究の第三段階、すなわち転諭による超越のうちでの最大なものの理解を「思弁」とよんでいる。クザヌスが、「この思弁を転諭的になしかたで最大なものの領域で、その最も単純な最も無限な本質にかんしておこなう」と述べるように、この超越とは、有限なものはその無限性においては合成ではないあり方で一であるという第二段階の洞察を、更に、端的な直接性において、すなわち、有限なものを跳びこえて無限性そのものにおいて、かつ合成ではない在り方を端的に合成に先立つ単純性そのもののうちで、洞察することにほかならない。したがって、その超越は、有限なものをその相異性を離れることなしに同時に無限な一のうち、かつ、この無限の一をその一を離れることなしに同時に有限なものの相異性のうちに見ること、換言すれば、一を多からの合成として多の後に見るのでもなくまた多を一から一の後に見るのでもなく、対立を越えた次元そのものの、いわば一即多の即場の開示にほかならないと思われる。

III-2 このような思弁をクザヌスは、先づ、第16、17章で、無限の線、すなわち様々な形をした有限な線の無限性における在り方について遂行し、無限な線と有限な線の関係を、上述の事態として、すなわち対立を越えた次元では最大なものは一切のものであり一切のものは最大なものであるというあり方でそれ自体として存在するが、有限なものとの対立のうちで最大なものが規定されたり、有限なものが他の有限なものとの関係のうちで規定されたり、有限なものが最大なものとの対立のうちで規定されるという、対立のうちで見られる限り、この最大なものはその最大性そのものではなく、有限なものもそれ自体のあり方ではなくなるという洞察から、「最大なものは一切のものであるとともに一切のもののうちの如何なるものでもない」ということとして明らかにするのである<sup>22)</sup>。次に、無限な三角形においては、どの三辺もどの三角も無限で合成なしに一で、かつ辺も角も合成なしに一であることから、最大な三角形における一の数的多重化なしの三性的在り方(三一性)を洞察し、区分(distinctio)が無区分(indistinctio)であるような神的事情がらにおいて矛盾するものをその単純な原理のうちに把握する三・一性に蓬着するのである<sup>23)</sup>。更に、無限

な円においては、中心と直径と円周が一致することから、最大なものの全体は無限の中心として最も完全に一切のものの内部にあって単純で分割できないものであり、かつ、無限の円周として全ての外部にあって一切を包みこんでいるものであることが洞察され、最大なものの一性はあらゆる相対的な対立に先立つ同一性 (identitas) で、かつ相異性 (diversitas) と他性 (alteritas) がそれに対立しない同一性であるという理解へ導かれるのである<sup>24)</sup>。そして、最後に無限な球においては、長さ、巾、深さという三つの最大な線が中心で相交わっている。最大な球の中心は直径と周に等しいので、中心はこれら三つの線に等しくそれらすべてであり、すべての始まり・真ん中・終りでもある。従って、最大なものは、最も単純にかかる無限にすべての長さ、巾、深さであり、同時に、その長さ、巾、深さは最大なものにおいて、一にして最も単純な分割できない最大なものである。そして、球は線と三角形と円との現実態であり、球より高次の形態が存在しないが故に、最大なものは、その単純性において一切を包括する現実態として、諸形相の形相 (forma formarum)、存在の形相 (forma essendi)、あるいは最大な現実的存在性 (maxima actualis entitas) として存在していることが、理解されるのである<sup>25)</sup>。このように、転喩による思弁を通じて、一切の対立を越え現実に最大度に、絶対的な単純性に可能態として含まれている最大なものの在り方が現実態においてある一にして三性的な本質において洞察されるのである。

## VI

IV-1 このように対立というあり方の否定と排除を通して、決して知ることができないという無知の自覚のうちでのみわれわれにもたらされる「最大性」のあり方、クザーヌスが、『知ある無知について』第1巻第2～6章において、「それ以上大きなものは何も存在しえないもの (hoc, quo nihil maius esse potest)」、*「充盈していること (habundantia)」、*「最大と最小の一致」、*「一なるもの (unum)」、*「存在しうるところの一切 (omne id, quod esse potest)」、*「絶対的必然性 (absoluta necessitas)」*等と名づけたものを、われわれは「なにものもそれに対立することがない (cui nihil opponitur)」あり方、「非対立」というあり方として規定することができると思われる。

IV-2 以上の考察から、知ある無知とは、先づ矛盾律を原理とし比較によって成立する人間の認識の限界の知であり、真理が対立を越えた矛盾律を越えた次元にあることを観つつ (visio)、象徴的探究を通じて無限に漸近する、どこまでも深まりゆく開

かれた知の立場ということができよう。その限り、クザーヌスの知のあり方はスコラ的な「*analogia entis*」から区別されるとおもわれる<sup>26)</sup>。そして、この「知ある無知」の立場において開示された「対立を越えた一性」の次元が、どこまでも対立の以前に、対立の次元に非対立という仕方で見いだされることによって、神と世界が相互否定媒介的に、したがって世界が神へまた神が世界へ解消されることなく「*complicatio・explicatio* (包含・展開)」として動的統一のうちで世界が神の顕現として理解される限り、世界とそこにある事物はもはや実体的なあり方ではなく相互に相異なる事物がその相異性において他の一切の事物と統一を保ち、そしてこの相異性は世界の一性に同時に世界の一性も事物の多に解消されることなく相互否定媒介的統一を保っているあり方として把握され、この関係性 (Relationalität) という在り方に新しい存在論の萌芽がみられると思われる<sup>27)</sup>。

### 註

テキストは、“*NIKOLAUS VON KUES PHILOSOPHISCH-THEOLOGISCHE SCHRIFTEN*” Bd. I. II. herg. von Leo Gabriel, Herder. Wien. 1964, 1966 (以下 W. S. I. II. と略記) を使用した。

- 1) *coincidentia oppositorum* という語は、*De docta ignorantia* のうちにはなく、*Apologia doctae ignorantiae* (W. S. I. S. 530), *De coniecturis* II. I. (W. S. II. S. 84) に見いだされる。新スコラ主義からの *coincidentia oppositorum* の解釈として、P. Wilpert. “*Das Problem der coincidentia oppositorum in der Philosophie des Nikolaus von Kues*”, in: *Humanismus, Mystik und Kunst in der Welt des Mittelalters*, Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters, hg. v. J. Koc III (Leiden 1953), 39~55. があげられる。“*coincidentia oppositorum*” と矛盾律の関係を解明したものとして K. Flasch, “*Metaphysik des Einen bei Nikolaus von Kues*”, E. J. Brill, Leiden 1973. がある。
- 2) *Epistola auctoris ad Dominum Iulianum Cardinalem* (W. S. I. S. 516)
- 3) *Ibid.*
- 4) *De docta ignorantia*. I. 3. (W. S. I. S. 200)
- 5) *De venatione sapientiae* XXVI, XXXVII (W. S. I. S. 124, S. 166)
- 6) Vgl. *De docta ignorantia* I. 1. 3. (W. S. I. S. 194~196, 202)
- 7) Vgl. *ibid.* I. 3. (W. S. I. S. 202)
- 8) *Ibid.* I. 1. (W. S. I. S. 194)
- 9) *Ibid.* I. 24. (W. S. I. S. 280)



- 10) *Ibid.* I. 24. (W. S. I. S. 282)
- 11) *Ibid.* I. 24. (W. S. I. S. 278~286)
- 12) Vgl. *De deo abscondito* (W. S. I. S. 300~304)
- 13) *Ibid.* (W. S. I. S. 306)
- 14) Vgl. *De docta ignorantia* I. 25. (W. S. I. S. 286~290)
- 15) Vgl. *ibid.* I. 26. (W. S. I. S. 292~296)
- 16) Vgl. *ibid.* I. 3. (W. S. I. S. 200), クザーヌスの象徴的探求をトマス主義の *analogia entis* の独自の表現として解釈する試みとして、例えば、R. Hauptst, “*Nikolaus von Kues und analogia entis*” in: *Miscellanea Mediaevalia* II, Berlin 1963, 682 ff. 他方、無限と有限、神と世界の間の不可通性をクザーヌス哲学の根本特徴と見なすものとして、Hirschberger, “*Das Prinzip der Inkommensurabilität bei Nikolaus von Kues*” in *MFCG*, Bd. 11. S. 39~61.
- 17) Vgl. *ibid.* I. 10~12. (W. S. I. S. 222~232)
- 18) *Ibid.* I. 12 (W. S. I. S. 232)
- 19) Vgl. *ibid.* I. 13. (W. S. I. S. 234~236)
- 20) Vgl. *ibid.* I. 14~15. (W. S. I. S. 236~240)
- 21) Vgl. *ibid.* I. 16. (W. S. I. S. 240~246)
- 22) Vgl. *ibid.* I. 16~17. (W. S. I. S. 240~252)
- 23) Vgl. *ibid.* I. 19. (W. S. I. S. 256~262)
- 24) Vgl. *ibid.* I. 21. (W. S. I. S. 266~270)
- 25) Vgl. *ibid.* I. 23. (W. S. I. S. 274~278)
- 26) Vgl. K. Jacobi, “*Die Methode der Cusanischen Philosophie*”, Karl Alber, Freiburg/München 1969. S. 174~240.
- 27) Vgl. H. Rombach, “*Substanz, System, Struktur*” Bd. I. Karl Alber, Freiburg/München 1965. S. 140~228. Leo Gabriel, “*Dialektisches Denken: Cusanus und Hegel, Wissenschaft und Weltbild*” Bd. 23, Wien, 1970. S. 328~348. K. Jacobi, “*Die Methode der Cusanischen Philosophie*”, Karl Alber, Freiburg/München 1969.